

ネキリムシ類

多くの野菜類、豆類、花き類の茎を切断する蛾の幼虫の総称です。

典型的な広食性害虫で100種以上の食草が知られています。

チョウ目ヤガ科に属し、国内にはタマナヤガ、カブラヤガ、オオカブラヤガ、センモンヤガ、シロモンヤガ等が確認されていますが、ここではタマナヤガとカブラヤガについて紹介します。

1. 生態等

タマナヤガ、カブラヤガともに類似した発生態で、全国的に混発します。

タマナヤガは寒冷地では越冬できないため、春に温暖地から飛来した成虫がその年の発生源になります。

成虫は4～5月頃に発生し、夜間に下葉や地際に1～複数個を分散して産卵します。

幼虫は若齢～中齢期は地際部に生息し食害しますが、摂食量が少ないため被害は目立ちません。中齢期以降は、昼は土中に潜み夜間に株の根元をかみ切ったり、生長点を食害し、発生量の割に被害が大きくなります。年3回程度発生し、被害は春～初夏、秋に多くなります。

表1 タマナヤガとカブラヤガの比較

		タマナヤガ	カブラヤガ
成虫	開帳	44mm～48mm	37mm～45mm
	前翅の色	雄：灰褐色 雌：黒褐色 雌雄とも暗褐色斑紋がある。	淡灰褐色 中央部に環状、楔形等の複雑な斑紋があり、色調、斑紋に個体差がみられる。 ※雌は暗色を帯びる
	後翅の色	灰色	灰白色 ※雌は暗色を帯びる
	触角	雄：櫛歯状 雌：糸状	
幼虫	体長（終齢）	40mm～45mm	40mm前後
	体色	暗灰褐色	暗灰色または暗緑色
	体表面	サメ肌状 大小の顆粒が疎に（老齢）	滑らかで弱い光沢 微小な顆粒が非常に密に（老齢）
越冬	中～老齢幼虫 蛹や成虫の場合もある。 ※耐寒性が弱く、本県では越冬困難	中～老齢幼虫 蛹の場合もある。	
休眠性	なし	あり	
発生数（本県）	年3回	年3～4回	



ネキリムシによるハクサイ苗の被害



カブラヤガ成虫

2. 発生状況

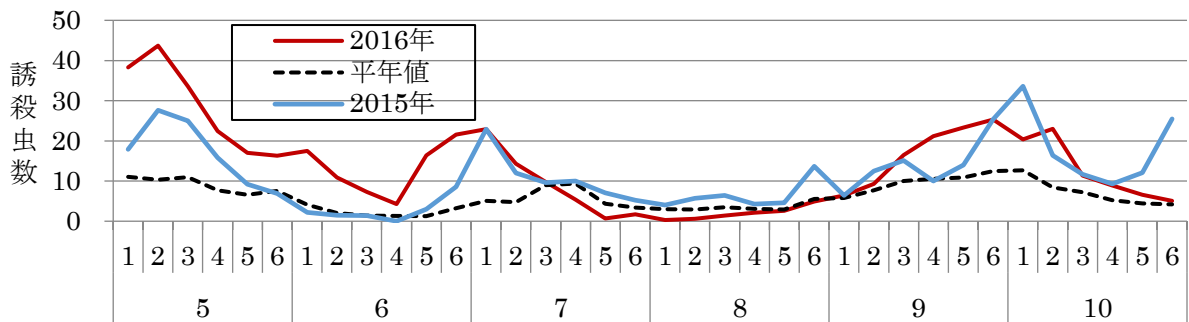


図1 期間中の誘殺消長 (かほく市内日角：カブラヤガ)

病害虫防除室では、県下2か所にフェロモントラップを設置し、発生消長を調査しています。

越冬世代が春に羽化、飛来し、秋まで3回程発生します。今年度の誘殺数は493頭で過去最高となり、3年連続増加しています。

3. 防除対策

- (1)被害を確認したら作物の根際に粒剤（誘殺剤、殺虫剤）を散布します。被害株付近を浅く掘ると捕殺が可能です。
- (2)ネキリムシ類は土中の浅い所に潜むので、粒剤（殺虫剤）を土壌混和する際に深く混和しないようにし、殺虫効果を高めます。
- (3)例えば鳥取県のニンジンの防除試験では、フォース粒剤の防除効果が高く、20～25日程度持続します。以降はガードベイトAを15日毎に2回散布する体系を組み合わせるとニンジンの食害抑制効果が高い報告があります。
- (4)ほ場内や周辺の雑草が発生源になるので除草を励行し、播種、定植作業は除草後10日以上空けて行います。また冬季の雑草地耕耘は越冬幼虫、蛹の駆除に有効です。

表2 粒剤における防除効果（鳥取県：ニンジン）

区	処理方法	被害株率 (27日後)
ダイアジノン粒剤 5	6kg/10a 全面土壌混和	17.5
フォース粒剤	4kg/10a "	7.0
無処理	-	38.5